
黒き魔剣と弓の魔術師

御倉リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き魔剣と弓の魔術師

【Nコード】

N5782X

【作者名】

御倉リヨウ

【あらすじ】

魔物と人間が長きに渡って争い合う世界。魔術師エストは調査で訪れた廃神殿で一人の少女と一振りの魔剣に出会ったことにより、壮絶な戦いに巻き込まれていく。

——これは全てを憎む青年の物語。

／1（前書き）

ども、御倉リョウです。

この作品のほかにも書いてる作品があるので更新速度は激遅ですがなんとか完結させられるように頑張ります！

この作品が皆様の暇つぶしになったら幸いです。

拙いところも多々あると思いますがよろしくお願いします。では！

／
1

／
1

雲一つない青い空。緩やかに吹く風が木々を揺らし木の葉が空に舞い上がる。木々が生い茂る森に挟まれた道を二つの馬車が縦に並ぶように走る。お世辞にも快適とは呼べない後ろの馬車の中、黒い外套を羽織り、その下にまたもや黒い服を着込んだ青年は徐に立ち上がり馬車の扉を開け放った。

「お、おい。どうした、エスト」

同乗者の赤い外套を羽織った青年に尋ねられエストと呼ばれた青年は振り向かず一言だけ呟き、

「仕事だ」

駆ける馬車から飛び降りた。

「え、おい！？ ああくそつ、勝手に行動すんなよっ！」

青年は悪態を吐き、御者に馬車を止めるように言った。

十

馬車から飛び降り、難なく着地した青年——エスト・クローズは鋭い双眸を正面の森へと向けた。同時に現れたのは複数のヒトガタ。しかし、その身長は人の1.5倍はあり、顔に鼻や耳がなく拳くらの大きな瞳が一つと乱杭歯が並び立つ大きな口、とそれは人とは言えない容姿をしていた。

人はこれらの生物を“魔物”と呼んだ。

「おい」

エストは目の前の異形に取り乱すこともなく淡々と告げる。

「今すぐに俺の前から失せれば見逃す。だから——」

言い終える前に魔物の一匹がエストに飛びかかる。巨体に似合わず俊敏な動きをする魔物はその巨大な拳を振り下ろし——

「——それが答えか」

瞬間、魔物の腕と首が断ち斬られていた。断末魔をあげる間もなく絶命した魔物は灰と化す。

「次は、どいつだ？」

腰から抜いた剣の切っ先を魔物の群れに向ける。

呆然としていた魔物たちは我に返り雄叫びをあげながら目の前の青年に襲いかかった。エストが地を蹴る。

極限まで引き絞られ放たれた弓のような速度での疾走。魔物の懐に潜り込み己の得物を魔物の腹に突き刺す。

「はあっ！」

気合いと共に剣を振り上げる。魔物は腹から頭にかけて切り裂かれ消滅した。

仲間が二匹も一瞬で倒された魔物たちは動揺しながらもエストから距離を取った。そして十数歩、距離を開け身近にある岩石を掴み投擲する。

「ちっ……！」

エストは赤子の頭ほどある岩石を身を屈めて躲すが投擲はまだ終わらない。剣で叩き落したいところだがエストの長剣は何処にでもある平凡な剣なので折れてしまうだろう。

——面倒だがやるか。

エストは剣を正眼に構え、意識を集中させ言葉を紡ぐ。

「——森羅を統べる蒼き光輪よ」

言葉に呼応してエストの足元に蒼白い光が浮かび上がる。その光は周囲に広がり円を形作った。

「我が剣に宿りて光鋼と成せ」

刹那、足元の光が刀身を包み込んだ。

刀身が蒼白い輝きを纏うと気合いの声と共に縦に一閃。目前まで迫ってきていた岩石は真つ二つに斬られ、派手な音を立てて背後の木々を薙ぎ倒した。

魔術。

世界と同化しこの世の奇跡を行使する術。その使い手は人々から尊敬と畏怖を込めて『魔術師』と呼ばれた。

「ふっ……！」

エストは俊敏な獣のような速度で魔物へと迫る。

「■■■■——ッ!?」

動揺しつつも魔物は全力で岩石を投げつけるがエストは身を低くしてやり過ごす。躲せないものは強化した剣で切り落とす。

肉薄と同時に一閃。

頭部から両断された魔物は断末魔の叫びをあげ消滅した。振り向き様に剣を横に風ぎ、エストに迫っていた最後の魔物の首を断ち切った。

「おーい、エストー！ どこだあ！」

「こっちだ、ウィル」

呼び掛けに応答すると程なくして赤い外套を羽織った青年——ウィルヘルム・ハートネットが現れた。ウィルはエストの姿をみるや否や陰しい表情を浮かべ、走り寄ってきた。

「一人で突っ走んなよな！」

「一人の方が楽だ……それより」

「なんだよ！」

エストは溜め息を吐きながら鞘から剣を抜き、

「あまり騒ぐな。魔物が集まる」

もう遅いがな、と呟いた。エストとウィルの周りを十数匹の魔物が囲むように立っていた。

巨大な鳥のような魔物。子牛ほどの体軀をした赤と黒の斑模様の毒々しい色をした蛙。先程エストと戦った魔物と同種もいる。他にも形状様々な魔物が禍々しいほどの殺気を二人に注いでいた。

「……あー、悪い」

「気にするな。それより“アレ”をやれ」

ウィルはその言葉を聞き戦意に満ちた笑みを浮かべた。

「了解。援護よろしく！」

ウィルは瞳を閉じ、青空へと手をかざし言葉を紡ぐ。

「――聞け、天空の黒雲よ、裁きの稲妻よ」

風が吹く。すると先程まで雲一つない青空を灰色の雲が覆っていた。その雲は徐々にその身を灰色、そして黒へと変じ、膨らんでゆく。

「はあっ！」

詠唱に集中していて無防備なウィルへと迫る魔物をエストが長剣で切り払う。

「――其は疾きこと雷霆のごとし難攻不落たる雷電の城塞。その汝が光は爆散し、地上に蔓延る有象無象へと降り注がん！」

刹那、巨大な雷雲へと成長した雲が爆ぜ、無数の光と熱の塊――稲妻を産み落とした。

稲妻は衝撃波と轟音を生み、下にいる魔物の群れへと降り注いだ。魔物たちは断末魔をあげることさえできなかった。肉片が残らないほどに碎かれ、たちまちに灰と化し、爆風に攫われていく。周りの木々も同様に粉々に碎かれていた。

眩い稲妻が消え、ウィルがかざしていた手の平を下ろしたときには全ての魔物は消滅していた。

「相変わらずの威力だが、もっと制御を覚えた方が良いな」

粉碎された木を眺めながらエストは嘆息した。

ウィルは息をきらせ、額に浮かんだ汗を拭う。

「仕方、ねえだろ……。あんなだけ、の魔術は制御……が難しいん、だよ。お前は『強化』しか使えねえから分からねえだろうが」

深く息を吸い呼吸を落ち着かせる。何度目かの深呼吸でウィルの呼吸は落ち着いていた。

「下手したら“世界に吞まれちゃう”しな」

魔術とは精神を世界と同化させて初めて行使できる術。しかし、世界は人間が制御仕切れるほど易しくはなく気を抜くと容易く精神が世界に呑みこまれ、廃人となってしまう。

エストとウィルは世界に呑まれ、廃人と化した魔術師を何人も見てきた。そんな危険な術を今なお、遣い続けるのは『生活に必要だから』と『魔物に対抗するには魔術が必要不可欠』という理由だ。魔物は人間より遥かに高い戦闘能力を備えている。魔物と戦うには人間は非力すぎる。故に、性能の差を埋めるためには魔術が必要なのだ。

「お互い気を付けよう」

「だな——っておい、どこ行くんだよ」

「本当の仕事だ」

「荷物の護衛だろ？」

振り向き、半眼で友人を睨ウイルんだ。

「……古びた神殿の調査だ」

「あ、あゝ！　そういやそうだったな」

あはは、と笑うウィルに嘆息。

「途中まで乗せていってもらう条件にお前の仕事を手伝うという話だったはずだ」

「うん、思い出した。もう少し乗ってけばいいんじゃないか」

「いやいい。このまま森を進めば半刻（一時間）で着くだろう」

「ふうん？　了解。気を付けろよ？」

「お前もな」

エストは森へ、ウィルは道へ、互いに背を向け、歩み始めた。

／1（後書き）

飽くまで予定ですがぬるい性描写っぽいのも書く予定なので（愛撫とかそんなん、本番なし）

12／20 主人公の服装を変更。

簡素な甲冑をなくし、外套の下は黒い服を着ただけ。

一人の青年が鬱蒼と生い茂る草木を縫うようにして歩いている。

青年は遠くに石造りの建物を見つけるとその歩みを止め、魔力を瞳に集め出した。

「あれか……」

青年——エスト・クローズは魔術で強化した瞳を細めながらぼつりと呟く。その建物こそが彼の目的地であるヴァルド神殿跡だ。

じつくりとその神殿を眺めた後、瞳に掛けた魔術を解き目蓋を瞬かせる。エストは音高く舌を打ち、忌々しそうに息を吐いた。

「……いくら倒しても沸いてくるか。流石に鬱陶しいな」

独り言のような言葉。だが次の瞬間、彼の背後からいくつもの殺気が放たれた。

——一つ、二つ、三つ……十はいるか。

腰に差した長剣に手を掛けながら背後の気配を数え、ふんと鼻を鳴らした。

「数を増やすのは結構だが——その程度では逆効果だ」

不愉快そうに吐き捨て剣を抜いた刹那、周囲の魔物が一斉に襲い掛かってきた。

十

近付くにつれて神殿の崩れ具合が酷いことに気が付いた。

石造りの外観は雨風に晒され風化と劣化を繰り返し黒ずみ、所々

はひび割れていて地面から伸びた何かの植物のツタがそれらを隠すように絡み付いている。

一部の壁は崩れ去りその穴を鳥たちが出入りを繰り返していた。遙か昔は大陸一の信徒の数を誇っていたとはとても思えない有り様だった。

「魔物に攻め落とされた神殿、か」

哀れなものだ、心の中でそう呟き入口へと視線を向けるがその瞳は大きく見開かれた。

そこには白いナニカがいた。

驚くべきは全身が白い事ではなく“先程までそこには何もいなかった”ということだ。

——馬鹿な、いつの間に……、神殿に意識を注ぎ過ぎたか。

気配に気付けなかった。それはエストにとって普段ならありえない失態だ。これが魔物ならどうなっていたか分からない。

そう、あれは魔物ではなく白いローブを纏った人間だった。

「おい」

「え？」

素っ気ない口調での呼び掛けに白いローブを纏った者が驚いたように被っていたフードを脱ぎながら振り向いた。

どくん、と心臓が跳ねた。

彼の前には肩まで伸ばした金色の髪と白磁の陶器のように白い肌を持った少女がいた。歳は十代半ばに見え、十八歳のエストより幾分か幼く見えた。彼女は今まで見てきたどんな女性よりも美しくエストは目を奪われる。だが、整い過ぎたその容姿はまるで人形と向かい合っているような錯覚を覚えさせた。

風にそよぐ金の髪。

潤った碧い瞳。

小さな薄紅色の唇。

その全てから目を離すことが出来ない。彼は目の前の少女に？魅入っていた？。

「こんにちは」

碧い瞳を細め、見る者を魅了する微笑を浮かべた少女はあまりにも普通の挨拶をした。

「――貴方は、世界が綺麗だと思う？」

突飛な問い掛けに首を傾げようとしたが口は無意識に動いていた。「思わない。世界は裏切りや争いによって流される血で染まりきっている」

「貴方は、優しい人。――でも同時に心の中に深い闇を抱えているのね」

「……何故、そう思う」

「なんとなく、じゃ駄目かしら？」

悪戯っぽく微笑み、全てを見通してしまいそうな瞳を向ける少女に返事を返すことはなく、彼は自分の名を告げた。

「俺はエスト・クローズ。魔術師だ」

普段のエストなら名乗ることもせずそのまま無言で神殿に入って行っただろう。何故そうしなかったのか？ エスト自身にもそれは分からなかった。

名を告げられた少女は微笑みを浮かべたまま右手を胸に当て彼に応えた。

「私は……シア・クレメント。貴方と同じ魔術師よ」

「シア……。何故こんな所へ？」

エストは朽ち果てた神殿を顎で示す。

「探し物をしているの。エストはどんな御用？」

エストは依頼され調査に訪れたこととその依頼の内容を話した。

この森は人間が暮らす街や村といった集落が近くに多く存在するということもあり、この地に住む魔物はそう多くなく、強くない。魔物の他に鹿や猪などの獣が住み、果物などの食料も豊富で人々は度々この森に足を運び狩りなどを行う。魔物を見つければ狩人たちは力を合わせ退治もしくは撃退する。

だがここ数日の間でこの森に住む魔物の数が爆発的に増えたのだ。

村や街を力ある魔物の大群に襲われ、民が皆殺しにされたという話もある。そしてどうやら、魔物の沸く場所というのが滅ぼされた神の城——ヴァルド神殿跡らしく、その調査に駆り出されたのがエストなのだ。

その話を聞いたシアは不思議そうに首を傾げ疑問を彼に投げかけた。

「お仲間はいないの？ 一人でこなす様な内容じゃないと思うのだけれど……」

「仲間は必要ない。一人の方が何かと動きやすいからな」

その返答を聞いたシアは瞳を閉じ小首を傾げてうーんと思案し始めた。百を数える時間が経ってもその姿勢は崩れず、流石に声を掛けた方がいいのではないかと思い始めた頃。

「——決めた」

閉じていた瞳が開かれこの青空のように澄んだ瞳がエストの黒い瞳を見つめる。その瞳には強い意志が宿っていた。

「私も付いていくわ」

「………何故だ」

口を開くのに三つほどの時間を要した。

「私はこの神殿で探し物がある。そして貴方は魔物が湧く原因を調べに来た——ならお互いに手伝い合うことは可能なはず、そうではない？」

それに一人で魔物の巣窟に足を踏み入れるなんて自殺行為よ。私はエストに死んでほしくない」

「必要ない。調査を終えたなら直ぐに帰るさ。……それに俺は、死なない」

——今はまだ死ぬわけにはいかない。

その決意は思うだけに留め、シアの提案を却下する。逆にこの場から去るように言ったが彼女は首を縦に振らなかった。

「もう決めたの。それに少なくとも——私は貴方より強いつもりよ？」

からかように囁き、ウインクをした彼女は神殿内へと続く出入り口をくぐった。

「っ！ おい、待て！」

慌てて出入り口をくぐり、足場の悪い通路を器用に歩くシアの横に並ぶ。彼女を去らせるための言葉を探していると、シアは「暗いわね」と呟き、人差し指を立てるとその指先からぽうと赤い火が現れる。その火は彼女の指先から離れ宙を漂いながら闇に覆われた周囲を煌々（こうこう）と照らした。

エストはシアの行動に目を瞠（みは）った。

——無詠唱、だと……？

魔術を使うには人の心は雑念に溢れており些細なことで精神が乱れ、世界に吞まれて廃人と化してしまう。

だが詠唱——自己暗示をすることにより己の気分を高揚させ、行おうとする奇跡を明確にすることにより世界を御しやすくするのだ。だが、かなりの熟練魔術師は詠唱なく瞬時に世界と同化し魔術を行使することが出来るのだがそれは『火を灯す』だけでその『火を操る』といった複雑な事は出来ない。

——つまり、間違いなくシアは一流の魔術師をも凌駕する実力を持っている。

「うん？」

いつまでも火を見続けているエストに気付いたシアは小首を傾げた。

「……逸（はぐ）れるなよ」

「ええ」

同行を許可されたシアは微笑み、エストにそつと身を寄せてきた。身体が——手と手が触れ合いそうな距離。

エストは何も言わなかった。

「……あの、エスト？」

暗い神殿内をシアの魔術の火を頼りに進むこと四半刻（三十分）。エストの横を寄り添うように歩くシアが躊躇いがちに声を発した。エストは彼女の方を向くことなく「何だ」と淡々と言った。

「えと、可笑しな事を言うけど笑わないで聞いてほしいの……」

「ああ」

周囲への警戒を緩めることなく話の先を促す。シアは少しの逡巡の後、口を開いた。

「――魔術って何？」

「……………」

何かの冗談ではないかと思った。

何しろ、一流の魔術師を凌駕する魔術師が基礎を知らないというのは可笑しいを越え只々異常でしかないのだ。黙りこくったエストに不安を感じたのかシアは上目遣いに彼を見た。

「……知らないのか？」

こくん、と無言で頷くシアを前にして、エストは軽く困惑した。

「ならばどうやって魔術を行使しているんだ」

エストの問いに少しの間を得て、

「……私にとって魔術は手足のようなモノなの。エストだって手足が何故動くかなんて知らないでしょ？」

「それはそうだが……」

「お願い、貴方の分かる範囲でいいから教えてもらえないかしら？」
好奇心と懇願を乗せた碧い双眸に見つめられ、彼は瞳を逸らしながら了承した。

魔術とは？世界と同化してその世界に内包される奇跡を行使する術？だ。

魔術を行使するのに必要な魔力は？内魔力？と？外魔力？の二つに分かれる。？内魔力？とは魔力でもあり術者の生命力でもあるのだが、魔力として使える分と生命力として使える分とで予め決まっている。

「だから、魔術師としての才能があるものは短命な者が多く、逆に才能のないものは長寿な者が多い」

「エストはどっちなの？」

「俺は、魔力1…生命力9——つまり才能がない側だ」

？外魔力？は謂わば世界の魔力。世界の中に満ちる世界の生命力そのもの。魔術師は世界と同化することによりその？外魔力？を世界より引き出し、己の？内魔力？を用いて加工することにより初めて魔術という形に成すことができるのだ。

そして？外魔力？はつまり純度の高いエネルギー体であるため、炎や剣といったモノに加工してその純度を下げなければならない。

「つまり、濃い酒を飲むには水で薄めなければならないのと同じだ」
一応、加工せずに？外魔力？単体を使うことも出来るが、魔術として安定せず、世界に吞まれる危険性が高まってしまふ。だが、当然加工していない？外魔力？の方が純度が高く、強力な魔術を行使できる、らしい。

「らしいって、曖昧なのは何故？」

「誰も加工前の？外魔力？を使った事がないからだ。使おうと試みた者はその全てが世界に吞まれ、廃人と化し、今では試みようという者は存在しない」

「——こんなところだな。理解でき——」

「……エスト？」

言葉が途中で途切れたことを不審に思ったシアがエストの顔を覗き込む。彼はシアに応えることもなく腰に差した長剣に手を伸ばした。

耳に痛いほどの静寂が周囲を支配していたが、それは僅か五秒ほどの時間だった。

——ぎぎい、ぎいぎぎい。

鉄を引き摺るような音だった。それも先の尖った鉄、そう——剣を引き摺る音に似ていた。

徐々に近づいてくる金属音。シアは頭上より少し前に漂う魔術の火を前方の通路に飛ばした。

明かりに照らされ浮かび上がるのは一匹のヒトガタ。

灰色の髪とひげをぼうぼうに生やしたその頭は存外に大きく、悪臭漂う口は三日月の様に歪んでいる。緑色の皮膚に覆われた身体は一見贅肉に塗れているがその身体は下手な剣を通さないほどに強靱である。

「鬼だ。^{オーガ}剣と盾を持っているみたいだな」

鬼と呼ばれた魔物は獲物を見つけたことに歓喜の雄たけびを上げた。

「シア、そこを動くな……！」

刹那、エストは駆けだしていた。

長剣は腰に差したまま、だがいつでも抜けるように手を添えたまままでの疾走。知性の低い鬼は迫りくる青年を迎撃すべく、奇声を発しながら剣を振り下ろした。鈍重な、しかし受け止めることが可能な程に重い一撃。

だが、

「■■■■——!?」

魔物にはどう映ったのか。

錆びついた剣が頭蓋に直撃する寸前、エストは地を蹴り壁へ、そして天井へと跳躍する。鈍重な魔物は超高速の三次元移動に翻弄され、早くも獲物を見失った。

——間合いは十分。

落下する前に天井を蹴った。鬼の真後ろに着地と同時に抜刀しつつ強化の呪文を詠唱する。

「森羅を統べる蒼き光輪よ、我が剣に宿りて光鋼と成せ——！」
斬！

蒼い光を纏った剣は岩の様に頑強な身体を横一文字に断ち切った。
「はあっ！」

次いで斜め下から斜め上へと掬い上げるように一閃。四つに分割された魔物の身体は音もなく灰となった。

「……すごい」

長剣を鞘へと納めたのと同時に、少し離れた位置に佇んでいたシアが呆然と囁いた。

「……身体に魔力を通して筋力を強化しただけだ。魔術師なら誰でもできるだろう」

「確かに強化したのなら出来る人間もいるわ。でも、貴方が強化したのは剣だけで身体には？何もしていない？」

びたり、進むために踏み出そうとした一歩は止まる。

「貴方の剣には魔術の痕跡があるのに身体にはそれが一切ないわ。身体に魔力を通しただけ、と言ってもそれは確かに魔術よ、残滓すら残らないのは使っていないということに他ならない筈。ねえ、エスト——」

白いローブを纏った少女は問う。

「——貴方は、本当に魔術師なの？」

ぎり、と青年が奥歯を噛み締める音だけが薄暗い通路に響く。

「……行くぞ、一所に留まれれば魔物が寄ってくる」

エストは答えずに歩き出す。

「……そうね、行きましょう」

／2（後書き）

こちらの小説も一時更新をストップします。一章が書き終わり、二章を書き始めたら順次更新していく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782x/>

黒き魔剣と弓の魔術師

2011年12月31日18時49分発行